

大日本エコロジスト翼賛会

たくき よしみつ
鐸木能光

【一】

朝から空模様は怪しかった。雲はますます低くなってきたような気がする。

明西町^{めいせいまち}でいちばん広い更地^{さらち}と思われる明西小学校のグラウンドに集まった町民たちは、そんな空をもう二時間以上も見上げていた。

「もってけるといいですねえ、お天気」

腕時計と空を何度も見比べている町長の星野充貞^{みつさだ}に、助役の栗本が声をかけた。

「んだなあ。しかし、降り出したときのために備えて、傘は用意してあるんだよな、栗本君」

「はい。特大のやつをしつかりと」

「花束の係は……」

「サヨちゃんです。あすこさ、しつかりと……」

「ああ……。しかし遅いな」

「はい。もしかしたら予定さ狂って……」

そのとき、山の向う側からかすかに爆音のようなものが聞こえてきた。星野は喋り続けようとする栗本を手で制して、そのかすかな音に耳を澄ませた。

音は次第に鮮明になり、やがて、大型ヘリコプター特有の、低いプロペラ音だと聞き分けられるようになった。グラウンドに集まっていた町民の間からもざわめきが漏れる。

ヘリコプターは、みんなが予期していたよりもすばやく、校舎の背後にそびえる鎮守山の稜線を跳び越えるように、コバルトグリーン色の鮮やかな機体を現した。

「でけえ！」

人込みの中から、少年が叫ぶ声がした。

確かに大きい。その、日本に何機もないというフランス製の大型ヘリの胴体には、知らぬ者のない「EBマーク」が、鮮やかなオレンジ色に染め抜かれている。

ヘリは何回か旋回すると、グラウンド中央の無人地帯にゆつくりと降下してきた。ドーナツ状に待機していた人垣が、さらに外側に向かって膨らんだ。

ヘリの脚が地面に着くと同時に、プロペラからの風で残り少ない白髪を乱されながら、星野町長は小走りに機体に近づいていた。栗本も慌てて後続く。

ドアが開き、まず体格のいい男が降りてきた。タラップがしっかりと固定されたのを確かめるように地面を踏みしめると、男は次に降りてくるべき中年男性に手を差しのべるようにしながら、ドアのほうを見上げた。

人垣の中から、音楽教師が慌てて飛び出してきて、待機していた楽隊の前に立った。中学校のブラスバンドと小学校の鼓笛隊が合体した急造バンドだ。音楽教師の指揮棒が振り上げられると、ファンファーレに続いて、『おお、まきばは緑』の演奏が始まっ

た。

決して上手とは言えない、いや、むしろ好ましい程度に下手なそのマーチに迎えられるようにして、問題の人物がヘリのドアから顔を出した。栗本の拍手を合図に、一拍置いて人垣の中に拍手の波が広がった。

問題の人物はタラップを降りながら、半分驚き、半分呆れたような表情で町民たちをゆっくり見回した。

「町長の星野でございます。本日は大変お忙しい中をこのようななんもない山奥にわざわざお運びいただきまして、恐縮でございます……」

中肉中背のその中年男に、星野は早口でそうまくしたてながら、深々と頭を下げた。

「どうも……」

男は愛想のない口調でそう言った。笑顔が見られないので、星野はますます緊張し、頭を低くした。

「役場の華」サヨちゃんが、大きな花束を差し出した。彼女は町一番の美人で、三年連続で「ミスすもも娘」にも選ばれている。男の顔にようやく笑みがこぼれた。しかしどこか投げやりな表情は消えず、笑顔というよりは苦笑に近い。

「いや、困ったねえ。ちよつと覗いてみるつもりで寄っただけなのに、これはこれは……」

日本最大の総合ディベロッパ企業・愛美須総合開発グループの会長・堀根清久は、そう言うのと花束の間から、サヨちゃんの顔を覗きこんだ。

「いやあー、ご覧のと通りの田舎でして、なんのおもてなしもありませんのですが、町民一同の歓迎の気持ちをお願いします、ハイ。とりあえず、こちらの体育館のほうで、ごく簡単なものですが、歓迎会のようなものを用意しましたんで、ハイ」

助役の栗本が進み出て、まるで弁明するように、そう切り出した。

「歓迎会？」

秘書役らしい大柄な男が、驚いたような顔で問い返した。

「それは話が違いますよ。電話でもお伝えしたように、今日はいくまでもプライベートな訪問に準じた扱いでやってもらわないと困るなあ。それに時間もそうないし……」

秘書は咎める調子で栗本に言った。

「いえ、そんな大袈裟なもんじゃねえ……ないですんで、ハイ、どうぞこちらへ」

栗本は腰を大きく折りながら、一行を先導し始めた。堀根は花束を秘書に預けると、自ら栗本の後に続いて歩き出した。

「榊田、ここはとにかく、町のみなさんのご厚意にお任せしよう」
「はい、会長」

一行が体育館の入口に向かって移動し始めるのを合図にするかのように、とうとう大粒の雨が落ちてきた。

役場の青年が素早く用意してあった傘を広げて追いかける。傘には大きく「晴山田カントリークラブ」と書いてある。隣町にあるゴルフクラブの備品らしい。しかし、青年が追いついたときには、会長はもう体育館の庇の下にいた。先導役の栗本が、振り向きざま、物凄い形相で青年を睨みつけた。

雨はすぐに本降りになり、山の向う側あたりから雷鳴も轟いてきた。

集まっていた町民たちも追いかけるように体育館のほうに走り出したが、楽隊だけは律義に直立したままで演奏し続けている。

たまりかねたサヨちゃんが音楽教師のところを駆け寄って、何やら耳打ちした。彼は頷くと、指揮棒を大きく横に振り、ようやく演奏を中止した。

急造楽隊の子供たちが楽器を抱えるようにして体育館のほうに移動すると、グラウンドには大型ヘリだけが残された。子供たちの中には、体育館には入らず、庇の下で、ヘリの勇姿にいつまでも見とれている者もいた。

そんな子供たちの中に混じって、サヨも体育館には入らず、雨に煙る運動場をぼんやりと見ていた。大切なゲストに花束を渡し終えてほっとしたのか、それとも何か別の理由からか、身体全体を言いやうのない脱力感が包んでいる。

やがて、体育館の中では、町長の挨拶が始まった。

「……というわけでして、みなさんご承知のように、わが明西町が総意を上げて取り組んでおります『わが心のふるさと再生プロジェクト・グリーンタウン・ツエンチーワン』の実現には、町の間年総予算をはるかに上回る五十億円という予算が必要となります。これは国の補助金というような手段では到底語れない規模の計画でありまして、ぜひとも日本が誇る世界的な一流企業のご協力が必要なわけです。すでに農林水産省のご指導もあつて、財団法人・平成農村開発塾の全面的ご協力を仰ぐことになっておりますが、本日その農村開発塾の特別顧問でもあらせられる愛美須開発の堀根会長様じきじきにお越しいただきましたことは、ひとえに町民全員の喜びとするところであり……」

星野町長は、前夜、半徹夜で書き上げた挨拶文を力を込めて読み上げていた。

壇上に用意された席に座らされた堀根会長の一行は、みんな複雑な表情だった。秘書の榊田は何度か腕時計に目をやっている。

町長の挨拶が終わると、ブルーの体操着を着た小学校一、二年生くらいの女の子が、原稿用紙を持ってマイクの前に進み出た。

胸の名札には「田村雪絵」と書いてある。

「堀根会長さま、愛美須開発のみなさま、明西町によろこそおい

でございました。私たちの町はこの十年間、東北でも人口減少率がいつも一番か二番の、小さな町です。私のお父さんも、冬はいつも東京へ工事のお仕事をしにでかけます。上のおにいちゃんも、今年から埼玉県に住み込みで仕事をしにいています。私たちの町は、特に有名な観光もなく、都会の人たちにはほとんど知られていませんが、豊かな緑や水が自慢です。都会の人たちにも、この豊かな自然をたくさん楽しんでほしいです。都会の人たちのふるさとになるような、美しい町にしてください。私たちも一生懸命がんばります。明西小学校二年、田村雪絵」

一本調子だが、精一杯声を張った挨拶文の朗読が終わると、聴衆の間から、町長の挨拶のときの二倍以上の拍手が起こった。

「まいりましたねえ……」

梶田が苦笑しながら堀根に耳打ちした。堀根は同じようにぎこちない笑顔を作りながらも、黙っていた。

「雪っぺ、カツコイイ！」

「町の代表だべ。すんげえな」

窓の外から体育館の中を窺っていた小学生たちは、ひそひそ声でそんなことを言い合っていた。

サヨは相変わらず半ば朦朧とした気分のまま、体育館の外壁にもたれて、中の様子を耳だけで追っていた。

空は暗くなり、雨はさらに激しくなってきた。グラウンドの真ん中に腰を据えた大型ヘリが、次第に輪郭をぼやけさせ、シルエットに変わっていく。

グリーンの恐竜のようにも見えるその特殊合金の塊は、まるで何かに挑戦するかのよう、敢然と雨粒を全身で跳ね返していた。

【十】

地面に鉄柱を打ち込む音が断続的に響き、その度に数百メートルは離れているこの空き地にまで振動が伝わってくる。

耕作は一匹のアオスジアゲハを見つめていた。都会には蝶などいないと思っている者も多いが、ちよつとした空き地や雑木林が残っている場所なら、まだこんなふうには蝶に出逢うこともある。

このへんはもともと下町の風情を色濃く残す場所だったが、高速道路へ続く新しい縦貫道のルートに決まり、今は取り壊されるのを待つバラックがいくつか残るだけになってしまった。

散らばった建築廃材の隙間を突いて生えているオオブタクサの葉に、その蝶は弱々しくとまっていた。鱗粉もかなり剥げ落ち、このままもう二度と飛び立つことはないかもしれないという風情だ。今年八十二歳になった耕作は、その蝶の姿に、自然と自分の残り少ない命を重ね合わせていた。

そのとき、耕作の鼻腔が肉の焦げる匂いを捕らえた。補聴器をしないと小さな音は聞き取りにくくなってしまったが、臭覚はまだまだ健在だ。耕作はその匂いの漂ってくる方向を捜しながら、ゆっくりと振り向いた。

空き地の向こうの、廃屋が点在する一角から、炎が上がっていた。焚火ではない。火事だ。

耕作は直観的に「主人」の危機を感じ取って、すぐに炎の方向に走り出した。とても八十二歳とは思えない身軽さだ。

火の出所は、やはりあの頑固ばあさんの家だった。

執拗な地上げに屈せず、最後まで居座った斎藤のばあさん。耕作の主人である大西熊弥は、今、ここではあさんと膝を突き合わせて説得にあたっているはずだった。

ただの火事ではなさそうだった。しかも主人の姿がない。

「クマーッ！」

耕作は悲鳴に近い叫び声を上げた。主人がこの炎の中にいる！

しかし、火の勢いはすでに手が付けられないほどになっていた。

この家を除けば地上げはほとんど完了していたバラック街だけに、付近には人影さえなかった。耕作の次に駆けつけたのは、通りを挟んだ向こうの建設現場で働いていた男たちだった。

「あんれまあ、こりゃあ手がつけられんぞ」

「誰か消防署さ電話しろや。人はいねが、中に」

東北弁のやりとりが妙にのんびりと聞こえる。

「オジイサン、アブナイヨ。コッチ、ハナレテ」

東南アジア系だろうか、色の黒い青年が耕作の肩を掴んで、燃えさかる家から遠ざけようとした。耕作は、されるがままに、二、三步後ずさりした。

斎藤ばあさんの家は、まるで紙細工のようによく燃えた。彼女の火葬を見ているかのようにだった。

消防車が駆けつけ、火は簡単に消し止められたが、すでに建物の痕跡はほとんど留めていなかった。

焼け跡の中から、黒こげの死体が二体出てきた。

一体は大きく、もう一体は小さかったので、親子のようにも見えたが、事情を知っている耕作には、それが自分の主人の大西熊弥と、この家の主・斎藤のばあさんだということは分かっていた。「小一時間ばかり、ばあさんと二人だけで話してくるわさ。ここで待つとれ。……しかし、これを最後にしたいもんだわなあ……」
ついさつき別れたばかりの主人の言葉を思い出しながら、耕作は呆然と立ちつくした。

どれくらい時間が経っただろうか。

警察が来て、現場検証が始まったが、検死の段で、ひと騒動あった。

大柄の男、つまり熊弥の焼死体の大腿部には、刃渡り二十センチ

チほどの出刃包丁が突き刺さっていたからだ。

「差し違えですわ」

取り調べの警官に、耕作はそう説明した。

「鬼熊」と恐れられた右翼の大物・大西熊弥が、こともあろうに八十過ぎの老婆の一撃でやられるとは……。

熊弥が赤ん坊のときから一緒だった耕作には、とても信じられなかったが、現実には目の前には変わり果てた主人の姿がある。

「うくん、どういうことか、最初から説明してもらえませんかね」
警官が耕作に言った。

しかし、耕作はすぐには言葉が選べず、長い間、二つの炭素の塊を見つめるばかりだった。

【才】

都心から高速道路で三十分。今では人口百万に迫る大都市に成長した越日部市こしかべの中心部からやや外れた街道沿いに、一風変わった店がある。

建物は木造の大きな二階建て。しかし、民芸風建築を意識したうどん屋や和食レストランなどとは明らかに違う。床柱は太く、壁は本物の漆喰だ。

両隣は有名なハンバーガーチェーン店とゲームソフトレンタル店。向かい側には紳士服専門店と外車専門の中古車屋。どこにもある街道沿いの景色の中に、その店だけが溶け込めずに異質な存在感を主張していた。

入口というよりは、玄関と言ったほうがいいのだろうか、檜でできた巨大な扉の横には、〈天然木家具製造販売・大熊工藝社〉と彫られた、これまた一枚板の重厚な看板が掛かっている。

その横の駐車場に、大型の黒いワンボックスカーが滑り込んだ。

後部ドアには日の丸。横にはへさつさと返せ 北方領土 大日本大熊憂国社」という文字が大書されている。

「へさつさと」という部分だけが赤く染め抜かれているあたりに多少のオリジナリティを感じるものの、よくある右翼の街頭宣伝車であることに間違いはない。

しかし、乗っているのは戦闘服を着た青年たちではなく、背広姿の痩せた老人が一人だけだった。

岩野耕作。

大熊不動産株式会社専務取締役・企画開発本部長。そして大日本大熊憂国社指導部長。彼がこの二つの肩書きを持ってから、すでに三十年になる。

耕作は、ゆったりした動作で運転席から降りた。小脇には紫色の風呂敷包みを大切そうに抱えている。

扉を押して建物の中に入ると、三匹の猫が出迎えた。

この店はいつも、客や店員よりも猫の数のほうが多い。高価な一枚板の座卓の上で、顔に傷をいくつもつけた野良猫が悠然と昼寝をしていたりする。

その中の一匹が、ニャアゴと一声、面倒くさそうに鳴いてみせた。

それが呼び鈴代わりになっているかのように、奥からおかつぱ頭の、若い女店員が出てきた。紺緋の着物に真っ赤な帯。まるで和風レストランのウェイトレスのような格好だが、顔立ちがどこか西洋風なので、あまり似合っているとは言えない。

「いらせられませ」

女店員は深々とお辞儀をしながら、老人を出迎えた。

「こんにちは、ミケさん。またお邪魔しましたよ」

老人はかすかな笑みを浮かべて言った。

「どうです？ 繁盛してますか？」

「いいええ、全然」

この前来たときも同じような挨拶を交わしたような気がする。畳張りの寝台や、桐の箆筒。用途がよく分からない巨大な木箱。質感だけは立派だが、普通の人は購入を躊躇いそうな家具が所狭しと並んでいる。すべてこの店の主人・大西熊笹くまざさの作品である。

「さて、ぼっちゃまはご在宅ですか？」

老人が訊いた。

「はい。ただ今……」

ミケと呼ばれた店員が、二階に通じる広い階段を登りかけたとき、上からパタパタという足音がして、人影が降りてきた。

店の主人・大西熊笹だった。巨漢の父・熊弥には似ず、ひどく小柄な男だ。身長は百五十センチほどだろうか。羽織袴に草履履き。パタパタというのはこの草履の音だった。

熊笹はもうすぐ四十になるが、皮膚の色艶がよく、五分刈りの頭のせいもあり、歳よりは多少若く見える。

実際、この格好で表を歩いていると、大学の応援団長によく間違えられる。

「じい。いらっしやい」

熊笹は人懐こい笑顔で、育ての親とも言える岩野耕作を迎えた。「ぼっちゃま、ご無沙汰でございます」

「堅苦しい挨拶はいいよ。それに、親父の密葬以来、なんやかやと頻繁に会っているじゃないか。この前会ってから、まだ二週間も絶っていないんじゃないか？」

「いえ、老い先いくばくもないじいにとっては、二週間は長い時間でございますよ」

「またそういう屁理屈を言う」

熊笹は苦笑しながらも、耕作を店内の応接セットへと促した。これも巨木を使った商品のひとつだ。

「まあ、掛けてよ」

「ありがとうございます。今日は改めて相続の件でご相談にまいりました」

耕作は早くも紫色の風呂敷包みを広げながら言った。

風呂敷包みの中からは、和紙の巻物が出てきた。

「これが会長の遺言書でございます。万が一のときに備えてと、弁護士の先生にお預けなさっていたものです。全財産、そして大日本大熊憂国社の会長の地位を、息子・熊笹に譲ると明記されてございます……」

耕作は、巻物松の一枚板でできたテーブルの上に置き、五十センチばかり広げてみせた。

「その話ならもう何度も聞いているよ。だがね、余輩は親父殿が財界の手先となって稼いだ金を相続するつもりはない。憂国社の件に関してね、跡を継ぐつもりは一切ない。余輩は親父殿以上にこの国を愛し、この国の現状を憂えているがね。徒党を組むのが好きじゃないんだ。余輩は、運動家というよりは、むしろ理論家のつもりなんでね」

「承知しております。ぼっちゃまのご著書は、うちの若い者にもファンが多く……」

「愛読者！」

「はい？」

「横文字はやめようよ、じい。憂国社の幹部ともあろう者が、軽々しく横文字を使うとは嘆かわしいね」

熊笹は間髪入れずそう言った。しかし、表情は柔和なままだ。

「これは失礼いたしました。うちの若い者にも愛読者は多く、ぼっちゃまのご指導の下なら、また新たな気持ちで活動を続けられるかと、みな異口同音に申しております……」

ミケが和菓子と緑茶を運んできた。

耕作は丁重に礼を述べた。

先に和菓子に手を伸ばした熊笹は、ゆつくりと言葉を選ぶように話し始めた。

「ねえ、じい。世間の人たちは、憂国社のような組織を単に右翼と呼んで恐れている。右翼とはそもそもなんだろうね。余輩は右とか左という色分けは好きじゃない。余輩が探求しているのは、いわゆる右翼思想というのとは違うと思っっているんだ。言ってみれば、真の愛国思想だね。人は余輩をこう呼ぶ。『愛国の家具職人』 『百年生きた木から、二百年保つ家具を作る男』とね。暴力団まがいの地上げ屋をやっていた親父殿と一緒にされては迷惑だよ」

「ぼっちゃま。それはあまりな言いようでございます。クマ……いや、会長は、決して暴力団なんかじゃございませんでした。命を落とされたあの日にしても、最後まで立て籠もったばあさんととことん膝をつき合わせて話をしようよと、単身乗り込んで……」

「刺されたわけだよ。八十過ぎのばあさまに。差し違える覚悟をさせるほど、相手を追いつめたってことじゃないか。暴力団まがいと言われても仕方ないだろう。」

それにしても、ばあさまに刺されて倒れるとはなあ。親父殿も無様な死に方をしたもんだ。刺される前に、毒でも盛られたのかね」

熊笹の問いに、耕作はしばらく返事ができなかつた。

耕作の脳裏には、あのときの光景が甦っていた。

二つの焼死体は、まるで茶道の稽古をしているかのように、きちんと向き合っていた。熊弥会長の太股には確かに包丁が突き刺さっていたが、それ以外は争った形跡はなかつた。

警察もまた、斎藤のばあさんが熊弥に睡眠薬か毒薬でも飲ませた後、憎さ余って包丁を太股に突き刺し、あらかじめ用意してあ

った灯油をまいて火をつけ、自分も死んだのではないかと見ていた。

しかし、耕作にはどうにも合点がいかなかった。

「分かりません」

長い沈黙の後、耕作はようやくそれだけ答えた。

その不自然な沈黙に、熊笹も、耕作が未だに熊弥の死を納得していないことを感じ取った。

熊笹はしばらく、黙って菓子をはおばった。

全身真っ黒な猫が一匹、音もなく近づいてくると、耕作の膝の上に飛び乗った。

ニイ……。

猫は一声、かすれた声で鳴くと、耕作の顔を見上げた。

耕作は無言でその黒猫の目を見つめ返した。

【木】

せわしなく動くワイパーの向こう側に、白河インターの表示が見えてきた。

東北自動車道下り線。激しさを増す雨の中を、黒塗りの右翼街宣車が三台、計ったように均等な車間距離を保って、一列に北上を続けている。その三台の前には、今では何台も残っていないだろうと思われる「観音開き」ドアの黒いトヨペットクラウンが走っていた。

三十年以上前の車が走っているだけでも大したものだが、この雨の中を時速百三十キロ前後で走り続けているのは、ほとんど驚異と言えよう。

前を走っていた車は、ほぼ例外なく、この異様な集団に気づくと、すぐに道を空けた。

先頭のクラウンは、大西熊笹自慢の愛車だった。エンジンは新型のものに載せ替え、脚周りなども強化してある。室内は金糸をまぶした絹織物で内張りされ、床には畳が敷いてある。

その畳張りクラウンの後部座席に座った熊笹の隣には、父・熊弥の骨壺を入れた白い包みが置いてある。その骨壺を軽く手で撫でるようにしながら、熊笹は運転席の耕作に声を掛けた。

「明西村も変わったんだらうねえ」

返事がない。

熊笹は仕方なく身を乗り出し、耕作の耳元で大声を出した。

「明西村も変わったんだらうね、じい」

耕作はまっすぐ前を向いたまま答えた。

「村ではなく、町でございます、ぼっちゃま」

「え？」

「とつくの昔に町に昇格しております」

「そうか……町か」

改造して走行性能は確保してあるとはいえ、さすがに高速走行時の騒音はかなりのものだ。

耕作は外していた補聴器を耳にかけ直し、改めて説明を始めた。「あのへんでは、町に昇格したのは明西が一番乗りでした。それも、熊弥会長が政府のお偉いさんたちにいろいろと働きかけたからでございますよ。それを今の町長の星野のやつが、まるで自分一人の力のように言いおつてからに……あんな小物に何ができるもんですか」

「しかし、親父殿は、明西では、村を売り飛ばした裏切り者と思われているんだらう？」

「とんでもございません。会長がご尽力されたからこそ、明西ダムも着工できましたし、村もダム開発で潤ったんです。ダムがで

きるまえの明西といったら、それこそもう、ただただ貧しく、雪深く、陸の孤島、東北のチベットなどと呼ばれておりましたからね」

そのへんの事情を、熊笹は今でもよくは知らない。

大西家は、明西村の村長を何代も務めてきた村の名士で、熊笹の父・大西熊弥も、若くして村民の尊敬を集める名村長だったと聞いている。

熊弥は当初、ダム開発には反対していた。湖底に沈むことになる土地の大半は、村代々の入会地^{いりあいち}で、一定のルールさえ守れば、村民の誰もが自由に出入りでき、豊富な山菜や薪を採ることができた。しかし、入会地といっても、明治以降はちゃんと土地登記上の所有者がいる。入会地の所有者は大西家だった。

村民たちは、大西熊弥村長の目の黒いうちはダム建設はありえないと思っていたし、電源開発を進めようとする電力会社や県会議員、県選出の国会議員たちを向こうに回し、一步も引かない熊弥村長の姿を頼もしく思っていた。

……そこまでの話は、誰に訊いてもほぼ一致している。食い違ってくるのはその後だ。

大西熊弥は、ダム開発を利用して中央官庁や財界と手を結び、故郷を売ってボロ儲けした……熊弥を知る多くの人はそう言う。

しかし、耕作の説明はかなり違う。

村民たちにダム開発のメリットがPRされるにつれ、村の空気が変わっていったのだという。

工事景気で人が集まり、金が落ちる。農閑期の仕事もできて、わざわざ出稼ぎに行く必要もなくなる。おまけに道路も整備され、生活は楽になる。そうした目先の利益に惑わされ、結局は村民の多くはダム誘致に傾き始めた。村議員にいたっては、ほとんどが賛成派に転向した。熊弥は最後までダム開発に反対し、孤立して

いった。

そんな中、心労が重なり、熊弥の妻・満が死んだ。

満の納骨が済んだ翌日、熊弥は土地を売り、当時まだ五歳だった一人息子の熊笹と、仙台からの使用人の耕作をつれて村を去った。

熊弥が村を裏切ったのではなく、村が熊弥を裏切ったのだ……耕作はそう主張する。

まだ子供だった熊笹には、真相は分からない。

ただ、それ以降、父親がすっかり変わってしまったことだけは確かだった。

熊弥はダム開発のやりとりで深めた中央政界や財界との関係を利用し、東京で不動産会社を興した。と同時に、右翼結社「大日本大熊憂国社」を結成し、「裏世界の便利屋」として名を馳せるようになったのだった。

そうした変身ぶりを見れば、やはり「大西熊弥は明西を売り飛ばした」という風評が立つのも当然だろう。

最後まで忠実な部下であった耕作までもが、村を出た後の熊弥に関しては何多くを語ろうとはしない。

「じいは明西に戻る気はないの？」

熊笹は耕作に訊いてみた。

耕作は黙っていた。

聞こえていないのか、聞こえない振りをしているのか、それとも答えたくてもすぐには言葉が出てこないのか、無表情な背中からは読みとることができない。

熊笹は構わず、その背中に向かって話し続けた。

「こんな組織、解散させちまったらいい。いい若いもんが、いつまでも日の丸の鉢巻きしめて、街頭演説を続けているなんて、精力の無駄遣いじゃないのかね」

「そんな風に言うもんじゃありませんよ、ぼっちゃん。みんな、おつむの出来は今ひとつですが、自分なりに日本の将来を真剣に考えている連中です。ぼっちゃんも思想にも深い感銘を受けておられます。ぼっちゃんも統率してくだされば、じいも安心して引退できるのでございますよ。とにかく、このままあの連中をポイと放り出すのはあまりにも無責任でございましょう」

やはり耕作には聞こえていたようだ。

自分の身の振り方には黙っていても、熊弥や憂国社のことを言われると、黙っていられなくなるらしい。

「じゃあ、あの若い衆らの身の振り方が決まれば、じいは明西に戻ってもいいと思ってるわけかい？」

耕作はまた黙り込んだ。

明西町に戻ったところで、耕作に身寄りはない。むろん、仕事もないだろう。しかし、熊笹は、胃までも耕作が、自分が人生の大半を過ごした明西の土地に愛着を感じていることを知っている。死ぬときは明西で……そう思っているのだとしたら、なんとか耕作が明西に戻れるよう取りはからってやりたかった。もつとも、熊笹が明西の有力者にツテがあるわけではなかったが。

磐越道ができて、奥会津方面への車の便はよくなった。

猪苗代を過ぎて数十分。一行が明西町に入ったときには、雨はかなり小降りになり、空も明るさを取り戻していた。

車窓から見る景色は、熊笹にはほとんど見覚えのないものだった。

立派な道路やスノーシエルトー。只見川に掛かる鉄の橋。山間に突然出現する電飾きらびやかなパチンコ屋。熊笹はその一つ一つについて耕作に質問し、耕作は詳細に答えた。

このへんは名だたる豪雪地帯だが、今は完全除雪が行われ、冬

でもチェーンなしでほとんど困らないこと。橋の工事の請け負いをめぐって、明西の地元業者が争ったこと。パチンコ屋は県外の人間が経営していること。

どうやら東京に出てからも、耕作は明西町とのつながりを失ってはいないようだった。問いただすと、耕作は歯切れが悪いながらも、暇をもらっては時折大西家の墓参りをしていたことなどを白状した。

熊笹は、自分が先祖供養もろくにしていなかったことを大いに恥じ入った。父への反発と故郷への後ろめたさが、自然と明西から足を遠ざけさせていたのだが、耕作にはこれでまた、頭が一つ上がらなくなったと感じた。

〈ようこそ明西町へ〉 という大きな看板を通り過ぎてからも、耕作は自分の家に帰るように、道に迷うこともなく車を走らせた。大西家の墓は、まむしやま 蝮山と呼ばれる山の山頂付近にある。ダムに埋まった土地は全部売り払ったが、この山だけは今も大西家の土地として登記されている。子供の頃、よく遊んだので、熊笹もこの山のことはおぼろげに覚えていた。

クラウンと銜宣車三台は、蝮山の頂上につながる細い道を登り始めた。

熊笹は、幼い頃の記憶を懸命にたどってみた。

車が通れるような道はなかったはずだが、雑木林のたたずみや、特徴のある大木などには見覚えがある。

「このへんに神社があつたよね？」

車窓から身を乗り出すようにしながら、熊笹は運転する耕作に声を掛けた。

「蝮大社でございましょう？ もうだいぶ前に宮司が死にまして、今は荒れ放題でございますよ」

「あ、今、屋根が一瞬見えたよ。あれだよね？」

「はい。もうすぐ参道入口に着きます」

その言葉通り、大きなカーブを曲がると、今にも倒れそうな木の鳥居が見えてきた。

参道には白いライトバンが駐車していた。

熊笹は耕作に車を止めさせて降りると、懐かしそうに境内を覗き込んだ。

「馬鹿こくでねえ。おめえの見え透いた親切なんぞにだあれが乗るもんか！」

突然、女が怒鳴る声が聞こえてきた。

「そつたら意地張るもんでねえよ、ばっさま。じっさま、待ってんだ。もう今夜がヤマでねえがって、医者様も言ってるがよ」

「なら、歩いていぐさ」

「馬鹿語るでね。早く乗れってが」

論争の相手は男の声だった。

熊笹は参道に入り、言い争う声のほうに歩いていった。耕作も運転席から降りてきて、後に続いた。

境内の奥、神社の横にトタン張りの社務所がある。昔はこの地区の人たちが寄り合いを開くときなどにも利用していたもので、熊笹の記憶にも残っているが、今は窓ガラスが何枚も割れたままで、使わなくなっただけでかなり経っているようだった。

その建物の前で、老婆と三十前後の男が言い争っていた。

「りえちゃん！ どうした？」

熊笹の背中越しに、耕作が先に老婆に声を掛けた。

言い争っていた二人が、同時にこちらを向いた。

男のほうはぎよつとした顔をしていた。熊笹の羽織袴姿に驚いたのだろう。

「耕ちゃん？ 耕作か？」

老婆が耕作を認め、泣き出しそうな顔で呟いた。

「んだ。耕作だ。どうしたんだ、りえちゃん」

「じっさまが危篤なんだと」

「そら大変でねが。早く行かねば。病院はどこだ？」

「会津市内だけんど、この馬鹿の車でなんが、行きたくね。耕ちやん、頼む。連れてつてくんねが？」

耕作は一瞬答えに窮した。

これから熊弥の骨を墓に納めに行くところだった。

「知り合いかい？」

熊笹が振り向いて耕作に訊いた。

「はい。武士ぶしまた僕さんとこのりえちゃんです。覚えてませんか？

ほれ、娘さんがサヤカちゃんつうて、蝮に噛まれて診療所さかつぎ込まれたことがあった……」

そう言われても、熊笹にはすぐには思い出せなかった。

「ぬし、もしかして、熊村長の倅せがれかえ？」

老婆が熊笹を食い入るように見ながら言った。

「はい。大西熊笹です」

「熊の倅のちび熊かあ？ おうおう、こらたまげたなもし。ちび熊だあ。ちびくまが帰ってきたかね」

「どうも……」

熊笹は会釈しながら、懸命に「武士僕さんとこのりえちゃん」が誰だったかを思い出そうとした。いや、耕作にとっては「りえちゃん」でも、熊笹にとっては、三十五年前でも十分「りえおばちゃん」くらいの歳だったはずだ。それにしても「りえ」とは、年齢に似合わない名前だ。

「まーあ、立派になってえ。そうかあ、ちび熊が帰ってきたかあ。そうかあ、そうかあ……」

老婆は自分に言い聞かせるように何度も繰り返しながら、熊笹のほうに歩み寄った。

「とにかく、おばあさんのご主人が危篤なんでしょう？ 事情はよく分からないけれど、耕作、おばあさんをすぐに病院にお送りして」

熊笹は、老婆の後ろで当惑した顔を見せている男のほうを一瞥しながら言った。

「会津市内までですと、往復していると二時間はかかりますよ。納骨は待っていてももらえますか？」

耕作が訊いた。

「もちろん。他に客が来るわけでもないし、のんびりやればいい。なんなら余輩も一緒に行こう」

「ぼっちゃま、かたじけのうございます。そんなら、りえちゃん。行くぞ」

耕作は老婆の手を取ると、車のほうに導いた。

「すまねえなあ耕ちゃん。ちび熊も、すまねえなあ」

老婆は丸い背をますます丸くして礼を言った。

「いいですよ。それより急ぎましょう。じい、道は分かっているんだらう？」

「はい」

「あ、ちゃんと後ろにお通ししなさい」

老婆をクラウンの助手席に案内しようとする耕作を制して、熊笹は自ら後部座席のドアを開けた。老婆は畳張りの床に一瞬驚いたようだったが、何も言わず、草履を脱いで小脇に抱えると、後部座席に座った。

後続の街宣車から、背の高い二十代半ばくらいの男が降りてきて、予想外の事態に面喰らったような顔で耕作のほうを見た。

「よし、我々が戻るまで各自小休止。井上、あとは任せる」

耕作は威厳のある声で、その男に命じた。井上と呼ばれた男は、敬礼で答えた。

黒い山高帽子のような形のクラウンは、今上ってきた道を下り始めた。後には街宣車三台と、呆氣にとられた顔の青年たちが残された。気の早い落ち葉をタイヤが踏みしめ、ピシピシという音をたてる。

細いステアリングを小気味よくさばきながら、耕作が訊いた。

「りえちゃん、あの若造はなにもんじゃ？」

りえちゃんと呼ばれた老婆は、不愉快そうに答えた。

「栗本んとこの馬鹿せがれだ。わしらの最後の土地を狙って、急に親切づらさするようになって。誰がほいほい乗せられるもんか。牛太郎うしたろうの恨みが、そんだったらこって忘れられるか」

「牛太郎さ、どうしただ？」

「連れてって、つぶしちまったんさ。もう年寄りでさ、オレが擦ってやったリングしか食べられねえよなばあさん牛をさ。つぶしたって、なんぼにもなんねえよな牛をさ」

「差し押さえか？」

「んだ。家もなんも、みーんな、そらもうズラズラとさ」

二人の会話は弾んでいるようだが、熊笹には何のことだかさっぱり分らない。しばらくは耳を傾けていたが、たまりかねて割って入った。

「すまないけれど、余輩にも多少は分かるように、最初から説明してくれないかな」

耕作とりえばあさんさんは、どちらが説明役になるべきか、譲り合うように沈黙した。

結局、りえばあさんが、直接説明し始めた。

「元を正せば、あの農業構造改善計画とかいうお上の馬鹿な計画が間違つとつたんじゃ。熊村長が村を出て十年くらい経ってからかねえ。国が農協を通して、大規模農業とかいうアメリカかぶれみてえなことをやれと言ひ出してさ。それで明西にも、農業改善

委員会とかいいうのができてな。やれ機械を買えとか、おめえんとは米は向いてねえから畜産をやれとか、好き勝手なことを言い出したんだ。うちはそれまで段々畑と水田が中心だったんだけど、委員会が盛んに牛を飼えと言ってきてな。……まあ、乗せられちゃったおらたちも馬鹿だったがなあ」

「ばあさんは悔しそうに、昔を思い起こすような目つきで話し始めた。

「最初に一頭入れたのが牛太郎でさ。それから委員会の言うまーんま、二十頭まで増やしたのさ。三千万借金して、牛舎も建てて、大型機械も入れてさ。だけど、ようやら調子さ出てきたと思った途端、今度は、牛乳はもう余ってて売れねえってのさ。借金はかさむ一方でさ、とうとう家まで差し押さえさ。牛太郎はもう歳でさ、今の配合飼料なんか食べられねえのさ。だから、おらがりんごさ擦って、さじで食べさせてたのさ。毎日、おらの顔見ると、りんごさ欲しくて、ババアー、ババアーって鳴くのさ。その牛太郎まで、あいつら持ってつちまったのさ。おら、しがみついてやめろって言ったのに、男が三人も寄ってたかって、諦めろ、離せ離せって……。牛太郎は物じゃねえ。牛乳さ作る機械じゃねえんだ。そんだったらことも分からん馬鹿どもが、土の偉さも忘れちゃって、この土地をなんぼで売れとか言い出すんだ。悔しいなあ、耕ちゃん、悔しいよお」

そこまで言うのと、りえばあさんは声を詰まらせ、皴だらけの顔をさらにくしゃくしゃにして泣き出した。

後を承けるように、耕作が言った。

「まったくだなあ。山の暮らしのことなんか、なんも知りもしねえ連中が、農業構造改善もクソもねえもんだ。あいつらのおかげで、明西も随分振り回されたんでございますよ、ぼっちゃま。確かにここは田んぼの一区画が狭いし、傾斜地ばかりだから、米作

っても、越後や庄内のように反収は上がりません。しかし、だからつつうて山をどんどん切り開いて畜産を振興しろというのは、山を知らんやつらの発想ですわ。牛の糞で川が汚れるつうて、川下の連中からは文句が出る。それを改善するためにまた金をかけて何かやると借金がかさむ……そういうことの繰り返しですわ」

「しかし耕ちゃん、やつぱ、おらたちも馬鹿だったよ。百姓はいろんな作物作るから百姓でんだ。百姓やってれば、とにかく自分が食う分くらいは何とかあったのさ。うすらでつかいテレビが欲しい、自動車が欲しいと、いろいろ欲を出さなけりゃいいんさ。だけど、牛だけ飼うってことになれば、牛乳が売れようが売れまいが、餌は買わなくちゃなんね。牛乳をためる桶やら何やら、機械も買わねばなんね。おらたちが食う分まで削って、訳の分かんねえ配合飼料さ買わされてさ。なにせ冬は雪が四メートルだかんなあ。そのへんの原っぱで草食わせてればいいってもんじゃねえのさ。気がついたときは田んぼも家もズルズラと取られて、もう百姓にも戻れねえ。もつと稼ごうと欲出したときから、貧乏が追いかけてくるのさ。蝮山のバチさ当たったんだなあ。今じゃあお上から年金貰って、お情けで社務所さ寝泊まりさせてもらって……。町役場はその恩を着せて、今度は最後に残った蝮山の麓のちっぽけな土地を売ってのさ」

「蝮山の麓は、おばあさんとこの土地だったんですか？」
熊笹が訊いた。

「ほんの一部がおらたちの名義になってるんだと。そんだったらごと、今まで気にしたことなかったがなあ。蝮山は誰のもんでもねえさ」

「元は入会地ですよ。他の土地はすべて売り払いましたが、この山だけは、今でも今でも大西家の土地です。麓のほうは知りませんが」

耕作がそう付け加えた。

一息ついたばあさんは、また興奮気味に話し始めた。

「栗本んとこのクソせがれ、牛太郎まで取って、今度は蝮山の土地まで取ろうてんだ。誰があんなやつ自動車になんか乗せてもらうか。乗ったら牛太郎のバチさあたって、座って楽しめた途端、ケツが腐っちまう」

「しかし、蝮山をどうする気だ？ あすこは雑木林だから、木なんか売れねえし、ゴルフ場にするにもスキー場にするにも半端だろう？」

耕作が訊いた。

「オートキャンプ場つうのけ？ くっだらねえもん、次から次へとよう考えつくわさ」

「誰がやるんだ？」

「第三セクターつうのけ？ 東京のでかい会社のケツに町がしがみつついて、一緒に悪さしようていう魂胆さ。情けねえなあ、耕ちゃん。情けねえよ」

りえばあさんはそういうと、再び声を詰まらせた。

車は今来た道を猛スピードで戻り、やがて会津市内に入った。めざす公立病院は町の入口にあった。

耕作が車を駐車場に回している時間も惜しみ、熊笹は受付で病室を尋ねると、りえばあさんの手を引いて、三階の病室に向かった。三階の看護婦詰所では、すでに受付から連絡が入っていたようで、髪を後ろで丸く束ねた年配の看護婦が二人を迎えた。

「武士侯晴耕せいこうさんのお身内の方ですね。こちらです」

その声は静かだったが、ただならぬ厳しさがこもっていた。病室ではりえばあさんの夫、武士侯晴耕が、酸素マスクをつけて横たわっていた。身体が小刻みに痙攣している。素人目にも、かなりまずい状態だということには分かった。

りえばあさんは枕元に歩み寄ると、夫の耳許で大声を上げた。「じいさん。じいさん。しつかりしろ。おらだ」

老人は妻のほうにかすかに頭を傾けたが、何も言わなかった。「じいさん、もう駄目か？ 頑張れねえか？」

ばあさんは夫の顔を抱え込むようにして、さらに大きな声を上げた。透明なプラスチックでできた酸素マスクの中で、じいさんの唇がかすかに動いたが、声にはならなかった。

りえばあさんの、まるで詰問するような強い口調に圧倒されながらも、付き添っていた若い看護婦が、なだめるようにばあさんの背にそつと手を置いた。

熊笹は部屋の隅に立ち、黙ってそんな光景を見ていた。

背後に人の気配を感じて振り向くと、いつ入ってきたのか、耕作が立っていた。耕作は目で「だめか？」と訊いてきた。熊笹は無言のまま、小さく首をかしげた。

【木一】

りえばあさんを病院に残し、熊笹と耕作が蝮山に戻ったときには、すでに陽がかなり西に傾いていた。まだ十月とはいえ、風はかなり冷たい。

林の間をぬって西陽が差し込む蝮大社の境内で、大日本大熊憂国社の隊員たちは「大掃除」をしていた。どこから見つけてきたのか、壊れかけた竹帚で境内を掃き清めている者、倒れた灯籠を起こそうと汗を流している者、手水場にたまった落ち葉をかき出し、排水口のつまりを直している者……。彼らの様子を、耕作は満足気に見渡すと、集合の号令をかけた。

「ごくろう。遅れたが、これから会長の納骨式に向かう。お墓はすぐそこだ」

リーダー格の井上が、小走りに寄つてくると、敬礼しながらこう報告した。

「指導部長殿、お客人がお見えになつております」
「客？」

「はい。会長のお身内の方とお見受けいたしましたがこの山の墓守りだとおっしゃいまして。向こうの建物の中でお休みいただいております」

井上はそう言うと、朽ちかけた社務所のほうを指差した。

話を聞き終わらぬうちに、熊笹が建物のほうに歩いていった。耕作もその後続いた。

「御免」

そう声をかけると、熊笹はガタついている引き戸を開け、建物の中を覗いた。

明かりもつけぬ薄暗がりの中で、肘をついて寝そべっていた男がゆっくりと目を開けた。髪は肩までのび、痩せこけた頬には髭が密生している。おまけに獣の毛皮でできたチョッキのようなものを着ていて、まるで歴史の教科書に載っている縄文人のイラストそのままだ。

男は熊笹のほうを見ながら、ゆっくりと身を起こした。暗がりの中で、青白い目が異様に光っている。

「初めてお目にかかります。余輩は大西熊笹と申す者。当家の墓をお守りいただいている方とのことですが……」

男はそのまま足を土間のほうに下ろすと、その場にすつくと立ち上がった。痩せているが、なんと身の丈は二メートル近くありそうな大男だ。小男の熊笹は、嫌でも首が痛くなるほど見上げるような格好になる。

「山の上の墓のことかね。守っているというのはオーバーだな。」

私は武士俣夫妻に頼まれて、あの墓地を手入れさせてもらつてい

るだけである。なにしろあそこは山菜や木の実の宝庫だからな。その挨拶の印として、時折墓の周りを掃除したりもする。それだけのことである」

朗々としたバリトンが、土間の空間に響き渡った。

「なにせよ、お世話になっております。余輩、根っからの親不孝者で、なにせ今日も、数十年ぶりに故郷に戻った次第。父の骨を納めるところであります。墓もさぞ荒れ放題だろうと、懸念しておりました」

「あの墓は、以前から武士僕夫妻が手入れしておられた様子ですな。ご主人が倒れられ、奥方も看病に明け暮れる毎日が続いていたので、新参者のぼくが後を継いだような次第であってね。もつともぼくは、大西家とは何の縁もない。あの茅野実りを教授させてもらっている返礼として、あの地の肥やしとなられた方々に敬意を払っているということですね。しかし、父上の骨を納めるのなら、近隣の者として末席を汚さしていただければと思うが」

「ぜひお願いいたします」

熊笹はそう言うのと軽く頭を下げた。

言い回しが時代劇のようで、そのくせ「ぼく」などという気持ち悪い一人称を使う。取っつきにくそうな大男ではあるが、礼節を全うするのは熊笹の信条だった。

耕作も、熊笹の後ろで、大男に黙礼した。

男は大股に歩き、戸口を出ると、満足そうに境内を見渡した。「しかし素直な連中ですね。右翼なら神社の掃除でもしてはどうかと言ってみたら、本当にやり始めた。特にあの井上という青年はなかなか見込みがある」

それを聞いて、耕作が露骨に不快な顔をした。隊員たちが自主的に掃除を始めたのだとばかり思っていたら、正体不明の縄文人の指図に従っただけだったとは。

「私は岩野と申します。失礼ですが、お名前をうかがえますか？」
耕作が大男に訊いた。

「瑠璃沼ぬりぬまという。瑠璃沼厚岸あつけし。おたくの墓地の隣に小屋を建てて、勝手に住まわせてもらっている」

「隣？ この山は、麓の一部を除いて、ほとんど大西家の土地で
すがの」

耕作はきつい口調でそう言った。偉そうな口をきいているが、要するに大西家の土地に勝手に住み着いている風来坊ではないか。
「もともとは入会地だと聞いた。山谷を勝手に区分して、一個人の所有物だと言い張るのは、明治以降、西欧の悪しき思想に汚染された者たちのたわごとである。土地というものは、本来誰のものでもない」

「あんた、それは勝手な……」

「じい、やめましよう」

瑠璃沼に食ってかかる耕作を、熊笹が制した。

「もうすぐ日が暮れます。早く親父殿の骨を納めましよう。瑠璃沼さんもぜひ一緒に」

熊笹は車のほうにさっさと歩き始めた。耕作は不満な顔のまま後に続いた。

熊笹は、りえばあさんにしたときと同じように、瑠璃沼と名乗る男のために、自慢の観音開きクラウンの後部ドアを開けた。

耕作は不服そうにそれを見ていたが、二人が後部に乗り込むのを見届けると、諦めて運転席に座った。

長いこと風呂に入っていないのだろう。瑠璃沼は異臭を放っていた。カブトムシの死骸のような臭いだ。耕作はわざとらしく咳き込むと、車の窓を全開にした。

畳敷き、絹の布張りの国産クラシックカーの後部座席に、羽織袴で正装した小男と、縄文人のようななりの大男が並んで座って

いるという図は、なんともシユールだ。これで、誰もいない山道ではなく、銀座の大通りを走ってみたいものだと思ひ、耕作は苦笑した。

クラウンは山道を苦もなく登っていった。後ろには街宣車三台が続いている。

「瑠璃沼さんは何をしていらつしやるんですか？」

車が走り出すと間もなく、熊笹が訊いた。

「普通に食ったり寝たりしておりますが」

「職業は何かという意味ですよ」

熊笹に代わり、運転席の耕作が苛立った声を出した。

「職業？ それをなりわいとして金を稼いでいるという意味においては、何もしておらんね。ぼくは。畑を耕し、魚を釣り、余った時間は本を読んだり研究をしたりしておるね」

「研究？ ほおお、学者先生ですか。それはそれは耕作が嫌味たつぷりに言った。

しかし、熊笹はなぜかこの男に、好意的な興味を持ち始めていた。耕作がそれ以上何か言い出すのを封じ込めるように、熊笹はこう訊いた。

「それで、どんなご研究を？」

「生態系物理学と呼んでいるね、ぼくは」

「セイタイケイ物理学？ どういう字ですか？」

「生態系の生態だよ。チョウチヨの生態、モグラの生態、ミヤマクワガタの生態の生態。物理学は物の理ことわりと書くね。即ち、エコロジ―とエントロピーの関係を究明する学問だね」

「余輩は横文字は好みません。日本語で説明していただけませんか？」

熊笹がきつぱりとそう言ったとき、車が停まった。

「ぼっちゃま、着きましたよ」

そう言うと、耕作は、臭気が立ちこめる車内にはこれ以上一時もいたくないという風に、即座にドアを開け、外に出た。

熊笹も車から降りた。

山の頂上付近は、かなり広い部分が平らになっていて、視界が開けている。草原になっていいる部分の一角に、乳白色の石でできた墓石が、ぽつんとモニュメントのように立っている。

熊笹の脳裏に、おぼろげに残っていた記憶が瞬時の内に甦り、眼前の景色とびつたり重なった。

家からは遠いので頻繁に来ていたわけではないが、この場所ではよく遊んだものだ。

三台の街宣車からも、迷彩服を着た青年たちが次々に降りてきた。

思ったよりもずっと見晴らしがよかったからか、それとも、死んだ会長がこれから埋葬される神聖な場所に着いたという気持ちからか、みな感慨深げだ。

「全員整列。これより、大西熊弥会長のお遺骨を納める」
耕作の号令とともに、隊員たちは墓に向かって一列横隊に並んだ。

熊笹は車から骨壺の入った白い包みを取り出し、墓に近づいた。
「野口、石井、納骨堂を開けるのをお手伝いせよ」
耕作が命令する。

「はい！」

いかにも力のありそうな青年が二人、小走りに墓に駆け寄り、熊笹が納骨堂の上の石をずらすのを手伝った。

陽はすでに、はるか西の山脈の向こうに沈もうとしていた。

雲が厚く、あまり鮮やかな夕焼けにはなっていないが、それでもなかなか味わいのある景色だった。

納骨堂はすぐに開いた。

熊笹は、骨壺の蓋をとめてある針金を外し、入っていた骨を残らずその中にあけた。

ここを住まいにしていたらしい竈馬が一匹、驚いて外に飛び出した。

「読経いたそうか」

ずっと見守っていた瑠璃沼が言った。

「あんた、お坊様なのかね？」

耕作が怪訝そうに訊いた。

「いや、無宗教だ。しかし、父親が坊主だったので、経典ならいくつか暗唱させられた。オーソドックスに、般若心教でもやるのか？」

「お願いいたします」

熊笹が言った。

瑠璃沼は墓の前に進み出ると、両手を軽く合わせ、朗々とした声で読経を始めた。

これには一同、すっかり感心した。今までずっと毒づいていた耕作まで、じっと目を閉じ、神妙な顔で聞き入っていた。

「わしの死後、一切の葬式は無用なり。花一輪たむけることあたわず。ただ、骨を故郷の山の墓に納めよ」

熊弥の遺書にはこんな一節が記されていた。その言葉を守り、花一輪持参はしなかった。葬儀も親族だけが集まり、式と名の付くような儀式は行わなかった。しかし、飛び入りの読経くらいは大目に見てくれるだろう。

耕作は、初めてこの瑠璃沼厚岸なる人物に、少しだけ心を許す気になった。

【木十】

翌日、明西町役場は、昨夜、町外れの温泉宿に泊まったという異様な一行の話題で持ちきりだった。

右翼の大物が、子分たちを連れて息抜きの旅行に来ているらしい。いや、こんな辺鄙な山里にわざわざ来るのは、何か目的があるってのことに違いない。ひよつとしたら、単なる右翼ではなく、新卒の宗教団体ではないのか。サティアンだのなんとか会館だのと呼ぶような施設を作る気ではないのか。などなど、勝手な憶測が飛び交った。

栗本助役の息子・常郎つねろうの報告が、情報をさらに混乱させていた。どうやらその右翼の親分は、武士俣のばあさんと仲がいいらしい。ばあさんが蝮山麓の小さな所有地を手放すまいとして、遠い親戚の右翼を呼んだのではないか。いや、逆にあればばあさんを懐柔するためにやってきた地上げの専門集団だ。なぜ、ばあさん一人にそんな大袈裟な地上げが必要なのか？ ……噂は噂を呼び、収拾がつかないままに役場の中を駆けめぐった。

ただ一人、町長の星野だけは、かなり正確な判断を下していた。星野は栗本助役の息子の話から、この一行のボスである小男が、かつての村長・大西熊弥の一人息子・熊笹であり、補佐役の老人が、大西家の使用人だった岩野耕作であることに気づいていた。

彼はすでに、大西熊弥の突然の死については知っていた。今では明西町とはほとんど接触がないとはいえ、かつての明西の実力者であり、自分の上司だった人物の動向は気になる。

熊弥は東京に出てからは、中央政界との関係をさらに強めたとも聞いており、これから町をあげて乗り出そうとしている開発計画に関して、何らかの接触をしてくるのではないかと気になっていた矢先のニュースだった。

星野は正直なところ、熊弥の死を知ってほつとしていた。

その直後に、熊弥の息子と、熊弥の片腕だった耕作が明西町に

乗り込んできたのだ。これは何かあるに違いない。

星野はさつそく、懇意にしている県会議員のルートを使い、この二人に関する情報を集め始めた。

そしてその日の午後には、思いもしなかった情報が飛び込んできた。なんと、「東北の天皇」と異名をとる大物代議士・松浜泰次まつはまやすが、この右翼集団とコンタクトを取りたがっているというのだ。

星野は助役の栗本を呼び、興奮気味に話した。

「やはり大西のおやじはただ者じゃあなかったんだなあ。松浜先生といえば、わしなんか未だにお目にかかったこともない殿上人てんじょうびとだもんなあ。その先生のほうから、大西の倅に会いたいゆうわけだろう？ やはり、大西のオヤジ、出世していたんだなあ。それとも倅のちび熊のほうが、オヤジより出世したのかねえ」

「どうなんでしょうね。それにしても愛美須開発の堀根会長といい、松浜先生といい、日本を代表する人たちですよ。明西町もメジャーになったもんです。なんもない田舎町が、なしてそんな人たちに注目されるんですかねえ。役場としても、緊張しますねえ」

栗本が言った。

「いやいや、もつと胸を張ろうよ、栗本君。明西は東北の名士になるんだ。守りではなく、攻めの発想で行こう。それより、さつそくその右翼の諸君と渡りを付けねばならんぞ。松浜先生のほうは、次の選挙に向けて、ちようど地元の会津市内に戻られているところだ。今週いっぱいはこちらにいらっしやるという話だから、できれば今週中にもセツティングしてほしいとのことなんだ。連中のほうは、まだ明西温泉に泊まっているのかね？」

「はい。すぐに調べさせます」

栗本は腰を屈めるようにして町長室を出ていった。

ちようどそのとき、当の大西熊笹は、单身、町役場を訪れ、力

ウンター越しに役場の花・サヨちゃんと話をしているところだった。

「蝮大社の社務所をしばらくお借りできないかと思っっているんですが、あそこはこの役場で管理しているんですか？」

「ええ……多分、そうだと思うんですけどお……。今は武士俣さんというご夫婦が住んでらっしゃってえ……」

「知ってます。ご主人が入院していて、相当悪いらしい。奥さんは昨夜から病院に泊まっておられます。先ほど電話で連絡を取ったところ、しばらくは戻らないから、社務所は自由にしてくれという話だったんですが、一応、公共性のある建物なので、こちらにも一言お断りするべきかと思ひまして。なにしろ総勢十一名ばかりの集団ですから、何かと目立ちますしね」

いつしかカウンターにはサヨちゃん一人が残り、他の職員たちは二人のやりとりを遠巻きに見守るような形になっていた。

「武士俣さん、そんなに悪いんですか？」

「……ええ」

もつても二日だろうと医者が出ているのを思い出しながら、熊笹は本当のことを答えるべきかどうか迷った。

今頃は耕作が見舞っているはずだ。ここでの用件が済んだら、自分もすぐにまた病院を訪ねてみるつもりだった。

熊笹がこの町にしばらく留まろうと思っただのは、一つにはりえばあさんのことが心配だったからだ。身寄りはないそうだし、じいさんの葬式を出すのも大変だろう。今まで大西家の墓を守ってきてくれたことへの礼の意味も込めて、何か自分にできることを探したかった。

「私、今日、仕事が終わったら病院に行ってみます」

サヨちゃんが言った。

「そうですか。病院は会津市内の……」

「知ってます。入院のとき、お手伝いさせていたいただきましたから」
サヨちゃんは急にはきはきとした口調になって言った。

「そうですか。それはお世話になりました」

「いいえ。福祉課の仕事ですから……」

そんなやりとりをしていたところに、栗本が恐る恐る近づいてきた。土俵だまりに入る力士のように、片手を前に出し、軽く上下に降って、二人の話に入ってきた。

「あとう、失礼ですが、東京の、大熊憂国社のかたでしょうか？」

「いいえ」

熊笹は、ていねいな口調ながら、きっぱりと否定した。

栗本は、当然予期していた肯定の答えが返ってこなかったのもので、一瞬動転し、次の言葉を継げずに口を二、三度ぱくぱくと動かし、た。

「余輩は大西熊笹と申します。大熊憂国社というのは、亡くなった父がやっていた政治結社の名前ですが、私は関係ありません」

「はっはい。そうでしたか。はい、いえ、いや、失礼申し上げますました。はい」

栗本は薄ら笑いを浮かべ、熊笹の顔を盗み見た。

「大西村長のご息のかたですね。私、当時はちょうど東京の大学のほうに学んでおりました、お父上のことは直接には存じ上げないので、はい。町長の星野が、ぜひご挨拶申し上げたいということでした、はい……」

奥の町長室のドアを半開きにしてこっそり様子を窺っていた星野が、タイミングを見計らったかのようにやってきた。

「いやあ、見違えましたなあ。ご立派になられて。覚えておられんでしょうが、私、お父様には大変お世話になっていた星野というものです。いやあ、よく帰ってきてきらしかったあ。まんずまず、奥へどうぞ。ささ、こっちはです。どうぞ」

星野は半ば強引に、熊笹を町長室に案内した。サヨちゃんははじめ、役場の者たちは全員、無言で熊笹の羽織の背中を見送った。

【木才】

その夜、武士俣のじいさまが死んだ。

ベッドの周りには、りえばあさんの他、熊笹、耕作、サヨちゃんがいて、四人に看取られての臨終だった。

「サヨちゃんの手さ握りしめて死ぬんだもんなあ。最後の最後まで、好き者人生まっとうしただな」

そう呟いたりえばあさんの目に涙はなかった。

「すみませんでした。でも、おじいさん、きつと私の手とおばあさんの手を間違えていたんです」

サヨちゃんが気まずそうに言った。

「いんや違う。じいさんはサヨちゃんのこと、すいとつたんだ。

まあ、サヨちゃんも長いこと手さ握られたままで、迷惑だったな。供養したと思って、堪えてくれっさ」

「そんな……、とんでもないです」

サヨちゃんは困り果て、目を伏せた。

じいさんの死を看取った四人の中でいちばん沈んでいたのは耕作だった。部屋の隅にある丸椅子に座り込み、目に涙を浮かべたまま身動きひとつしない。そのあまりの消沈ぶりに、熊笹も声を掛けられないでいた。よくは知らないが、武士俣のじいさんと耕作は幼なじみだったのだろう。

熊笹はりえばあさんにこう申し出た。

「葬式を手伝わせてください。しばらくは明西に滞在するつもりですから」

ばあさんは熊笹の顔をじっと見つめ返していたが、数秒の沈黙の後、こう答えた。

「いんや、これ以上ぬしに迷惑はかけらんね」

「迷惑だなんてとんでもない」

「いんや」

「お願いします!」

突然サヨちゃんが横から強い口調で言った。熊笹もばあさんも驚いて、サヨちゃんの顔を見た。

サヨちゃんは真剣な眼差しで頭を下げると、もう一度はつきりとこう言った。

「お願いします。私もできるだけのお手伝いはさせてもらいますが、親分さんがお力添えくださるなら、本当に心強いです」

「親分さん？ 私のことかね？」

熊笹は思わずうわずった声を上げた。

「余輩はやくぎではないよ。家具職人だ。あの迷彩服を着た連中とはなんの関係もないんです」

「そうなのけ？」

ばあさんが訊いた。

「ええ、余輩は親父殿とは違います」

「わしらとて、やくぎではないわ」

部屋の隅から、耕作が絞り出すような声で言った。

耕作はついに涙を堪えきれずに、頬を濡らしていた。泣き顔を隠そうともせず、耕作はもう一度、呟くように言った。

「わしらはもう、やくぎではございませんよ。ぼっちゃま」

【林】

武士俣のじいさんが死んだ翌々日、葬式の準備をしている憂国

社の一行を蝮大社に残して、熊笹は单身、会津市内の料亭に向かった。

〈東北の天皇〉に会うためだった。

出迎えた女将は、異様な車から降り立った羽織袴姿の小男を、平静を装って出迎えたが、あまりに目立ちすぎる車は、番頭に命じて、すぐに人目に付かないところに誘導させた。

「松浜先生はもうすぐお見えになります。ここでお茶でも召し上がっていただきますませ」

奥の部屋に通されるとすぐに、女将がお茶と菓子を持ってきた。熊笹はそのどちらにも手を着けず、上座を空けて、静かに相手が現れるのを待った。

告げられた時間ちようどに、相手は現れた。

「いやあ、待たせちゃったかな、大西さん」

松浜はトレードマークになっているだみ声、妙にくだけた東京弁でその声をかけてきた。「ちゃった」などと言っているが、イントネーションには強い東北訛りがある。

案内役としてか、恰幅のよい老人が同行していた。

「いえ、今参ったところですよ」

熊笹は座布団を外し、松浜の顔を改めて観察しながら答えた。還暦をとうに過ぎていているが、肌にはまだまだ艶がある。強い個性とざつくばらんな喋り口調で、東北だけでなく、庶民派議員として全国区的な人気を持っている名物議員だ。

「で、兵隊はまだ明西町にいるんかい」

松浜はさっさと、上座に用意された座布団の上に胡座をかくと、そう訊いてきた。

「兵隊……と申しますと？」

「若い衆のことさあ。ハッハッハ。組員と呼ぶのかね。それとも会員さん？ 社員？ ハッハッハ」

「兵隊はぶっそうでしょう」

同行していた老人が苦笑しながらそう言うと、熊笹の正面の席に座った。松浜より少し歳が上だろうか。年の割には肩幅があり、若い頃、相当鍛錬した身体だということがすぐに分かる。

「申し遅れましたが、私は岳見たけみといいます」

「鹿水しかみずグループの岳見といたら分かるだろう？ 今は鹿水建設の顧問を退かれて、平成農村開発塾の理事をしておられるのよ」
松浜が代わって紹介した。

「初めてお目にかかります。大西熊笹です」

熊笹は無難にそう挨拶したが、実は、岳見という名前も、平成農村開発塾などという組織のことも知らなかった。

どうやら、二人が用があるのは憂国社のほうだということはずぐに分かった。二人とも熊笹を憂国社の二代目会長だと決めてかかっているようだ。

本来なら「私はただの家具職人です」と明言し、早々に退散するところだが、熊笹は持ち前の好奇心と正義感から、二人の話をなるべく聞きだしてやろうと思っていた。

そう思ったからこそ、ここまでやってきたのだ。

女将が酒とつまみを持って現れた。三人に酒をつぐと、岳見の目の合図に従い、すぐに退席した。

岳見が簡単な乾杯の音頭をとり、三人は杯を飲み干した。

「じゃあ、時間もないんでね、話を進めましょう。用件だけ手短に言うから。もし引き受けてくれるなら、詳しいことはこの後で、岳見さんに説明してもらってね……いいかなあ、そういうことで」
松浜が切り出した。

「承知しました」

そう答えたものの、どこまで芝居をしていれればいいのか、熊笹は少し不安になってきた。松浜のような大物議員が、ちっぽけな

右翼団体になんの用があるのだろうか。聞き出した後で、私は憂国社とは関係がないでは済まされないかもしれない。

「それじゃあね、単刀直入にね、言うよ。我が国の過疎地帯における、地域開発事業に協力してほしいんだな。きみは明西町出身だし、故郷を救う事業に関係するのは、やりがいのあることだと思っただよ。どうだろうね」

熊笹は黙って松浜を見返した。

単刀直入というわりには、かなり抽象的な表現だ。まるで謎かけのようにも聞こえる。

「余輩は不動産屋ではありませんので、そのお話の意図がよく分かりませんが」

「そうだね。カッコつけずに言うかね、実はこういうことなの。」

最近、明西町にやっかいな連中が入り込んできて、地元の間人を煽動しておるんだな。リーダーは瑠璃沼っちゅうアカでね。共産主義の学者崩れよ。こいつが妙な思想を吹き込んで、素朴な田舎の人たちを惑わしているんだ。

やつは、明西の土地をただ同然でだまし取って、そこにいかかわしい宗教キャンプみたいなものを作ろうとしておるらしいんだな。オウムみたいなもんだね。こういう連中は、放っておくと面倒でね。すでに町役場の手に余る存在になっているらしいんだね」

「それを追い出せということでしょうか？」

熊笹は先回りして訊いた。

松浜は一瞬不愉快そうな顔になったが、すぐに不敵な笑みを浮かべ、続けた。

「そういうことだね。ダニの駆除だ」

「どうやって？」

「それは任せる。きみたちもプロフェッショナルだろう。ただし、条件がひとつ。私や岳見さんの名前は出さないこと。農村開発塾

はもちろん、明西町とも一切関係ないということでも動いてくれ。私自身は、きみらのような存在を特別視してはおらんけどね、世の中には右翼と言うだけで色眼鏡で見る連中が多いからね。分かるだろう？」

松浜はそう言うのと、手酌で酒をついだ。

熊笹は黙っていた。

岳見がすかさず報酬の話を切りだした。

「仕事相応の金は用意させてもらいます。それと、これを機会に、東北における地域開発事業での、いろいろな仕事を、手伝っていただけたらと思っています。大西先生の活動援助資金はもちろんのこと、私どもにできることはいろいろありますからね」

「どうだね。悪い話にはせんよ、どっちみち」

松浜がとどめを刺すように言い添えた。

熊笹はそれでもまだ黙っていた。

「何か疑問点でもあればうかがいますが」

岳見が言った。

「余輩は損得では動きません。思想で動くのを信条としております。こうと決めたことは、身銭を切ってもやりとげます。しかし、このお話は、まだどうもよく分からないことが多すぎます。

即答はしかねます」

「ほう。そうかね」

松浜はまた手酌で酒をつぐと、一気に杯の中身を喉の奥に流し込んだ。昼間からお茶代わりに酒を呑むところを見ると、噂に違わぬ酒豪らしい。

「変人だという話を聞いていたがね、気に入った。いや、これは失礼したと言うべきかな。だけどねきみ、これは日本を守る仕事なんだよ。きみの信条にも合致した、やりがいのある仕事だと思うがねえ」

杯を、音を立てて卓の上に置くと、松浜は声の調子を少し変えて話を続けた。

「きみの親父さん、大西熊弥さんにはいろいろと世話になったよ。明西町がまだ村だったときの村長だったな。彼のおかげでダム建設もうまく進んだし、その後も東京に出てきてもらって、首都圏開発の面でいろいろ協力いただいたわけだ。そんなよしみできみに声をかけたわけなんだが、明西町を始め、今、東北の村や町はどこも過疎に悩んでるわな。この三十年で人口が半分以下になった集落もある。このままでは東北は荒廃するばかりだろ。地方の町が荒廃するってことは、結局は日本という国が荒れていくことだな。地方と都市の格差をなくして、地方も都市も一緒に成長、発展していく……それが理想だわな。そのために、各役場も住民も必死に頑張つとるわけだ。」

その努力を踏みにじるようなダニは許せんわな。しかし、世の中、行政の努力だけではなかなか痒いところに手が届かんということもあるわさ。そこで、行政では対処できない部分で、きみのような思想家、活動家に現実的な協力をしてもらいたい……とまあ、こういうわけだ」

熊笹は黙って松浜の説明を聴いていた。平たく言えば、父の熊弥が首都圏でやっていたことを引き継いで、今度は田舎でやってくれという話だということも容易に理解できた。

しかし熊笹はストレートにそう問い返すことはしなかった。「父は明西の発展を祈ってダムを誘致したんだと思います。しかし、今もなお明西が過疎に悩んでいるというなら、やり方が間違っていたのかもしれないわけでしょう。そもそも父はなぜダム誘致の後、村を捨てて東京へ出たのか。父のことを、村を売った裏ぎり者と言っている村民もいます」

熊笹はそんなふうに探りを入れてみた。聴いていた松浜の口元

がかすかに歪んだように見えた。

「それは違うなあ、大西君。きみの親父さんはしつかり村の将来を考えていたんだ。今、あそこが再び過疎に悩んどるのは、時代の流れのほうだが、町の行政努力より先に進んでいるからなのよ。ダムを誘致せんかったら、今よりもっと悲惨なことになっただろう。農村の近代化は避けて通れん道だよ。資源のない日本は、技術大国として生き残るしかない。その中で、農村だけが江戸時代のよういつまでも貧しい生活形態に縛られてはいかん。日本中、みんな足並み揃えて経済成長せねばなあ……」

「とにかく、自分の眼で見て判断したいと存じます。時間をください」

熊笹はきっぱりとそう答えた。

松浜は無言で熊笹を睨み返したが、数秒の沈黙の後、こう言った。

「よかる。きみも久々の里帰りというわけだし、しばらくこの土地に馴染むのもいいだろう。返事はその後、改めて貰うことにしよう」

「ありがとうございます」

熊笹は軽く頭を下げた。その額のあたりに向かって、松浜はひととき大きな、響き渡るような声でこう言った。

「ただ、これだけは念を押しておくよ。きみにはどう転んでも損はさせん。私もガキの使いをやってるつもりはない。わざわざこんな席を設けてまできみに直接会ったことの意味を考えてくれ。日本を守るといふ思想は一致しておるわけだし、今後、末長く仲ようやっていきたいもんだね。こじれば、私ではなく、多分きみのほうが困ることになるんじゃないかな」

松浜は岳見に目で合図し、部屋の電話で女将に連絡させた。ほどなく女将が仲居を連れて現れ、料理を並べ始めた。

松浜は運ばれた料理にはほとんど手をつけず、十分ほどして先に席を立った。

松浜の料理を片付けようとした仲居に、熊笹は小声で言った。「姉さん、ご面倒だとは思いますが、それ、折り詰めにしてもられないもんでしょか」

まだ二十歳そこそこと思われる仲居は一瞬声を詰まらせたが、蚊の鳴くような声でようやく「ハイ」と一言答えた。

【林一】

その日、蝮大社では武士俣のじいさんの葬儀が行われていた。熊笹や耕作の心配をよそに、参列者はまあまあの数になっていた。不思議と若い者の姿も目立つ。町の若者人口の少なさを考えれば、不思議な現象だ。テントを張り、受付からお茶出しまでかいがいしく働いているのは、大熊憂国社の九人の若い隊員たちだった。弔問に訪れた者たちは、迷彩色の戦闘服に身を包んだ丸刈りの青年たちと、「大日本大熊憂国社」と大書されたテント屋根を見て、一様に驚いた表情を見せるが、ばあさんに特に事情を訊くでもなく、素直に焼香していく。神社で焼香というのも変だが、長い間神仏混淆だった国らしく、そんなことを指摘する者もいなかった。弔問客のうち若者たちのほとんどは、りえばあさんよりも、僧侶の代わりを務めている瑠璃沼厚岸と懇意にしているようだった。朽ちかけて表情が分かりにくくなっていく木彫の狛犬の横に座り込んでいる瑠璃沼を取り巻いて、さかんに何か話し合っている。ばあさんは社務所の隅で耕作と並んで座っていた。客が途切れると耕作と話をしている。相変わらずしゃきつとしていて、傍目には耕作が遺族で、ばあさんがそれを励ましているようにさえ見える。

耕作はひと月前の、熊弥の死のことを思い出ししていた。

あの斎藤のばあさんは、地上げ予定地に居座っていた最後の一人だった。あそこまでくれば、別に熊弥が乗り出すまでもなく、行政命令で立ち退かせることもできる。しかし熊弥は自分の力でばあさんを説得することにこだわっていた。

「これを最後にしたいもんだなあ」

ばあさんの家に向かうときに熊弥が呟くように言ったその言葉の真意を、耕作は今でも掴みかねている。もしかしたら、地上げ屋稼業そのものをこれでもう最後にしたいという意味ではなかったのだろうか。それともそれは、身寄りのなかった自分を幼いときから育ててくれた大西家に忠誠を誓いながらも、明西村を出てからはずっと主人の行動に心を痛めていた耕作の、希望的予感にすぎなかったのだろうか。

実は、耕作は密かに、熊弥の死は一種の自殺ではなかったのかと疑っていた。主人はこのところずっと悩んでいたようだった。特に首都圏の地上げが一通り終わり、次の仕事の打診を受けて以来、すっかり精彩をなくしていた。その新しい仕事の内容を、耕作は聞かされていない。しかし、それは熊弥に死を覚悟させるほどのものだったのではないか。そしてあの日、ばあさんに包丁を突き立てられたとき、その覚悟が固まったのではないか……。

太腿に包丁を突き立てられながら、痛みを堪えて正座し続けていた熊弥の姿を思い浮かべ、耕作は溜め息をついた。

「わしはりえちゃんに顔向けできねえなあ」

耕作は湿気と経時劣化でうねっている畳表を見つめながら、そう言った。

「なんでだ？」

「東京で、悪いこといっぱいやってきた。りえちゃんがあんなに嫌ってたあの若造のようなことを、俺もいっぱいやってきた」

「それは熊村長の命令でが？」

りえばあさんが訊いた。耕作は返事をしなかった。

ばあさんはふと思いついたように、こう言った。

「耕ちゃん、名刺さ持つてるべ。おらに見せてみる」

「名刺？」

耕作は戸惑った。確かに名刺は持っているが、熊弥が死んだ今、不動産会社も右翼結社も宙に浮いたままになっている。どちらの名刺も、今の自分の立場を表してはいないような気がした。

会社も結社も、熊笹が後を継ぐと言わないかぎり、どう解決しているのか分からないでいた。どちらも、他人に継がせるつもりはない。それは熊弥の遺言にも明記されていた。そのために株も熊弥と耕作が独占しており、残りの会社役員には結社の信用できる若手隊員たちの名前を利用してあった。つまり、会社の始末は、熊笹と耕作の胸一つなのだ。

耕作は少し迷ってから、持っている二種類の名刺のうち、めつたに使わないほうの名刺を取り出し、りえばあさんに渡した。

〔大日本大熊憂国社 指導部長 岩野耕作〕

「立派なもんでねえか。安心した」

りえばあさんが言った。

「名刺なんてもんは、人をだますためにあるようなもんだ。そんなちっぽけな紙一枚で安心したもなにもねえもんだ」

耕作が呆れて言った。

「いんや、分がるんだって、これが。悪党が持つてる名刺つてのはな、企画とか開発とかって字が並んでっからすぐ分かる。それから、なんとか不動産とかなんとか商事つてのも駄目だ。田畑さつぶして、百姓を給料取りにさせることばっか考えてる連中だ」

耕作は言葉を失い、しばらくうつむいていたが、やがて苦笑しながら、懐からもう一枚の名刺を取り出してばあさんに見せた。

〔大熊不動産開発商事株式会社 企画開発本部長 岩野耕作〕

今度はりえばあさんが言葉を失ってしまった。

「不動産、開発、企画……ひい、ふう、みい……見事に五つも入ってるなあ」

耕作はそう言って自虐的な笑みを浮かべた。りえばあさんも、しばらくは呆れた顔でその名刺を覗き込んでいた。

「耕ちゃんも、辛かったなあ……」

やがて、りえばあさんが、なだめるようにそう言った。

「いいや……」

耕作は意味のない生返事をした。耕作の脳裏に、炭素の固まりになった斎藤のばあさんの姿が浮かんだ。自分より辛かった者はたくさんいる。そうしたみんなの不幸をすべて一つに集めた分の幸福は、一体どここの誰のもとに行ったのだろうか？ もしも誰も幸福になっていないとしたら、自分がやっていたことは結局何だったのだろうか。耕作はもう一度自分の名刺をじっと見つめた。

そのとき、熊笹が戻ってきた。

熊笹はクラウンのトランクから、折り詰めに入った風呂敷包みを出すと、社務所の中の炊事場に向かった。炊事場ではサヨちゃん和隊員の井上が並んで、せつせと塩むすびを握っていた。

「差し入れです」

熊笹はそう言うと、折り詰めに入った風呂敷包みを配膳台の上に置いた。

「あまり量はないけれど、かなりうまそうな料理ですよ」

「はっ、ありがとうございます」

井上が姿勢を正して大声を上げた。隣のサヨちゃんが、びっくりにして井上の顔を見た。

「おいおい、余輩はきみの上司でも上官でもないんだから。ほら、お嬢さんが驚いてるぞ」

「ハイ……しかし……」

井上はまるで中学生のように頬を赤らめた。それを見ていたサヨちゃんが、クスリと笑った。

「お嬢さん、いろいろとすみませんね。おにぎりまで作らせてしまつて……」

熊笹はサヨちゃんに向かって軽く頭を下げた。

「いいえ、お礼をいうのはこちらのほうです。みなさんのおかげで、武士俣さんもどんなに心強いことか」

「いや、むしろご迷惑でなかったかと案じているんです。静かな山村に突然まがまがしい男たちが入ってきて、山の神社にたてもっているわけですからね。お嬢さんや武士俣さんに悪い評判でも立たなければいいが……」

「いいえ、そんな……」

サヨちゃんは口ごもった。が、数秒間、何かを噛み締めるように塩むすびを握る手を休めると、今度ははつきりとした口調でこう言い直した。

「町が割れているときには、どっちにもいい顔をするような態度は卑怯だと思ふんです。私は役場の接待係ではありません。きちんと意見を言える、一人前の公務員になろうと決めたんです」

熊笹も井上も、サヨちゃんのその言葉の真意がすぐには呑み込めなかった。

井上が熊笹に多少遠慮しながらも、こう言った。

「やはり、自分たちがご迷惑をおかけしているということでしょうか？」

「いいえ。だってみなさんはかつての村長さんのお遺骨をお墓に納めにいらつしやっただけでしょう？ そのついでに武士俣さんのお葬式も手伝つてくださっている。誰にも迷惑なんかかけていません。ただ……」

「ただ、何ですか？」

今度は熊笹が問いただした。

「武士俣さんご夫婦はこのところ孤立していたんです。この山の一部の所有権をめぐって。この山をオートキャンプ場にするという計画と、山の向う側の果樹園と田畑を別荘地にするという計画は、『心のふるさとプロジェクト』の第一期開発プランになっていましたから」

「何ですかそれは？」

「明西町は、平成農村開発塾のモデル開発地域に指定されているんです。この先十年間で、観光所得で町の年間収入の大半を賄えるように、町全体を改造するという計画です。もう、別荘地のほうはすべて土地買収も終わって、着工しているんですが、オートキャンプ場のほうは佐久間さんのところと頂上付近の大西家の所有地の分がまだ……。最初はそこだけ除いて開発するという話だったんですが、沢水の取水口を設ける関係で、どうしても佐久間さんの土地も必要になったらしいんです」

「全然知らなかったな、そんな話は」

熊笹は無然とした口調で言った。

「すみません。つい、余計なことを言ってしまった……」

「いや、そういう話は、きちんと知っておかないと余輩も困る。それで、武士俣ご夫妻はその開発計画に反対だったわけだね？
それで村八分にされていたと」

「そういう感じになりかけてました。そこに、瑠璃沼先生も入って、さらに揉めてしまつて……」

「瑠璃沼さんね。そもそもあのかたはどういうかたなんです？」

「国立大学の、物理学の偉い先生で、今は大学を辞めて、私設の研究所に勤めていらつしやるそうです。二年くらい前からこの町にちよくちよくお見えになつていて、今では一年の半分くらいは

この蝮山で過ごしていらつしやいます。教え子のかたが、山石^{さいた}地区で豆類の研究をされていて、今ではそのかたや、青年団の半分くらいの人たちが『まむし党』というグループを作って、町の開発計画撤回に向けて動き出しているんです。ほら、外で今、瑠璃沼先生と話している人たちです」

サヨちゃんの視線を追って、熊笹と井上が炊事場の窓越しに外を見ようとしたとき、社務所の反対側から、りえばあさんの大声が聞こえてきた。

「帰れ、帰れ！　じいさんが死んでも、おらの目の黒いうちは、絶対にハンコ押さねえぞ」

熊笹は炊事場を出て、声のほうに向かった。

りえばあさんが、栗本の息子・常郎^{つねろう}に食ってかかっているところだった。そばで耕作がなだめている。

「いやあ、ばあちゃん、その話で来たわけじゃねえんだって。今日のところは、じいさまに線香あげにきただけなんだが」

「騙されるもんが。じいさんが死んだがらって、話がほいほい進むんで思うな。じいさんはな、おらの手をしつかり握って、

『ええな、りえ、蝮山は絶対に悪魔の手に渡してはなんね』って、何度も何度も念を押しながら死んだんだがら」

「まあまあ、りえちゃん……」

耕作が見かねてりえばあさんの腕を掴んで引き寄せた。

「だから、その話は今日はやめってば。ほら、線香さ、あげさせてもらうぞ」

常郎はそう言うと、りえばあさんを無視して、簡素な祭壇の前に進み、そそくさと形ばかりの焼香を済ませた。

そのまま帰ろうとしたとき、熊笹と目が合った。

途端にさつと満面の笑みを浮かべると、栗本は中腰になって熊笹のほうに寄ってきた。

「いやあー、先生、先日は失礼いたしました」

熊笹は会釈したが、黙っていた。

常郎は片手を口の横に添えると、急に声を潜めて言った。

「で、どうでしたでしょうか。松浜先生とは、もう……」

「ええ。つい先ほど、お会いしてきましたよ」

「そうですか。いやあ、それはそれは……。実は、さつき役場のほうにも秘書さんから電話がありました。大西先生にしつかりと心のふるさとプロジェクトをご説明しておくようにと……はい。明日にでもさっそくご案内させていただきます。先生、明日のご予定は？ あ、その前に、今夜のお泊まりのほうですが、よろしければ、温泉のほうをすぐに用意させますが。明西温泉でもいちばんランクの高い宿が空いておりますので……」

「そのご心配には及びません。この社務所を貸していただければ十分ですので」

「いやあ、ここはまずいでしよう。いくらなんでも人が泊まれるような場所じゃないですから……」

二人がやりとりしているとところに、瑠璃沼が現れた。

「腹が減ったな。握り飯の配給はまだか？」

常郎がムツとした顔で瑠璃沼のほうを見た。

「栗本君、きみも食べていくか？ 僕が作った米だ。陸稲だが、味はいいぞ」

「ボクが作ったただあ？ よそ様の土地を勝手に耕して、よくそういうことが言えるもんだわ。そんないかがわしいまんまを、食うわけにはいかんが」

常郎はそう言うと、再び熊笹のほうに向き直った。

「先生、こういう怪しげな輩とは関わらんほうがええですけ」

「そうですか？ 余輩は瑠璃沼さんが作られたという米の味、早く楽しんでみたいですね。どうです、栗本さんも一緒に」

「いや、私は……」

常郎は黙ってしまった。

「じい、飯にしよう」

熊笹は耕作に声をかけた。

それを受けて、耕作は大声で号令をかけた。

「飯にするぞお！」

炊事場から、握り飯を山盛りにした膳を持って、サヨちゃんと数人の憂国社隊員が現れた。栗本の息子は不愉快そうにサヨちゃんを一瞥すると、無言でその場を立ち去っていった。



(その二へ続く)